

三次元理論による疑似主文タイプの挿入句の分析

清水 眞

九州工業大学工学部

1 はじめに

挿入句(parenthetical or parenthetical clause)あるいは挿入文(parenthetical sentence)と呼ばれる言語表現には、いくつかのタイプがある。(1)はその一例である。

- (1) a. I believe, the world is flat.
- b. The world, I believe, is flat.
- c. The world is, I believe, flat.
- d. The world is flat, I believe.

本稿では、(1)のタイプのものを、仮に疑似主文タイプの挿入句と呼ぶことにする。あたかも、補文(実際にはこれが主文であるのであるが)をとるように見えるからである。(1)のI believeのような疑似主文タイプの挿入句の分析には、これまで主にふたつの対立する考え方が存在してきた。

- (2) I believe the world is flat.

(2)から変形で挿入句を派生するという考え方と、挿入句は文副詞であるという考え方である。

本稿では、従来の研究を考察し、すぐれた点と問題点を指摘する。次に、三次元理論という考え方を提唱し、それにもとづいて、疑似主文タイプの挿入句の記述、分析を行う。

2 従来の研究

2.1 Ross (1973)

挿入句を変形で派生するという考え方は、Ross(1973)に代表される。Rossによれば、まずS繰り上げ変形をもとの文に適用して、補文全体を前置し、主文に繰り上げる。次にもとの主文を、移動規則により、文頭や文中に移動する。上の例で言えば、(2)にS繰り上げ変形を適用して(1d)を作り、その後I believeを文頭や文中に移動して、(1a-c)を得る。このような考え方の利点は、補文を取る述語と挿入句の関係を説明することが容易である、という点である。変形操作の結果(2)から(1)が派生したとすれば、両者の関連は明らかである。しかし、発話、思考を示す述語が断定でなければ挿入句とならない、述語によっては挿入句に用いることのできない、もとの(とされる)文と変形で派生した(とされる)文の間に意味解釈の違いがある、等の問題点がある。

2.2 Jackendoff(1972)

挿入句は文副詞であるという考え方は、Jackendoff(1972)に代表される。挿入句を句構造規則で派生し、解釈規則で意味解釈を附与する。よって、その分布は通常の文副詞と同じであるという予測が成り立つ。変形操作によって挿入句を生成するのではないから、もとの(とされる)文と変形で派生した(とされる)文の間に意味解釈の違いがあっても構わない、もとの文が存在しない例が存在しても構わない、等の利点がある。しかし、補文を取る述語と挿入句の関係が明確でない、挿入句と通常の文副詞は分布が完全に同じではない、等の問題点もある。

2.3 岡田(1984, 1985)

挿入句を変形で派生するという考え方、解釈規則で意味解釈を附与するという考え方のどちらにも問題となる点がある。岡田(1984, 1985)は、基本的に後者の立場を取るが、それで解決できない問題を、バイパスという考え方で解決しようとする。文法規則を基本的なもの、派生的なもの、ふたつにわけ、一定の条件が満たされる場合に限り、基本的な規則、あるいは規則群を基として、派生的な規則が修得される可能性が生ずるとする。挿入句すべてを、一様に統語的再解釈規則によって生成する必要はなくなる。しかし、挿入句に用いることのできる述語に対する定義が不十分である、バイパスという概念はpost hocな考え方である、等の問題点がある。

2.4 McCawley(1987, 1989)

McCawleyの考え方は、従来のものと全く異なり、非連続的な表層構造を想定するというものである。非常に興味深い考え方であるが、線形的順序における連続性を前提とする通常の文法理論とは非常に異なる。また、発話行為と文の表層構造を単一の樹形図に含むという点も通常の文法理論とは大きく違う点である。

3 三次元理論による挿入句の分析

3.1 解決すべき問題

まず、McCawleyの説とは異なり、線形的順序における連続性を前提とする統語論を取るとのことである。本稿では連続的ではない表層構造を考えない。また、発話行為と文の表層構造を単一のレベルに置かない。

統語論の問題としては、Jackendoffの論じる、疑似主文タイプの挿入句はしばしば文副詞のように振舞うということを検討に入れる。しかし、岡田の指摘する、文副詞と疑似主文タイプの挿入句の分布は完全に一致するわけではない、という点も重要である。

意味的には、Ross達の指摘するように、疑似主文タイプの挿入句が主節のように解釈できるという点、特に、補文を取る述語と疑似主文タイプの挿入句の関係を明確にしなければならない。また、Jackendoff達が論じているように、述語が断定でなければ、疑似主文タイプの挿入句とならない点も考察する。また、誰の視点であるかということも明確に示さねばならない。さらに、Jackendoffが指摘している意味解釈の違いをも説明しなければならない。

3.2 三次元理論

問題の分析を行う枠組みを作る上で最初に考えるべきことは、疑似主文タイプの挿入句が、主節のように解釈できる一方で、しばしば文副詞のように振舞うという事実である。ほとんど相反する事象のようにも思えるが、どのように考えるべきであろうか。疑似主文タイプの挿入句と文副詞を支配する節点は、通常のSではなく、もっと上のレベルであるという議論がある。McCawley(1989)では、発話行為と文の表層構造を単一の樹形図上に置き、疑似主文タイプの挿入句を支配する節点を発話行為のレベルとしている。また、BanfieldはSの上にEというレベルを設けている。すべての情報が同じレベルにあるのではないのかもしれない。Halliday(1978:116)は、意味体系を、概念的(ideational)、対人的(interpersonal)、テクニカル(textual)の三機能に分類している。だとすれば、談話を考える際、テクニカル構造が、ただ一本の情報の流れからなるというよりも、複数の情報の流れが組み合わさって構成されている、と考えることが可能かもしれない。

この考え方を図示すると、例えば、(2)は図1のようになる。主文'I believe'と補文'the world is flat'の間には、ある種のつながりが存在するものの、それぞれ異なる平面にあるスペースに属している。主文のスペースと補文のスペースは、三次元的な位相関係にある。

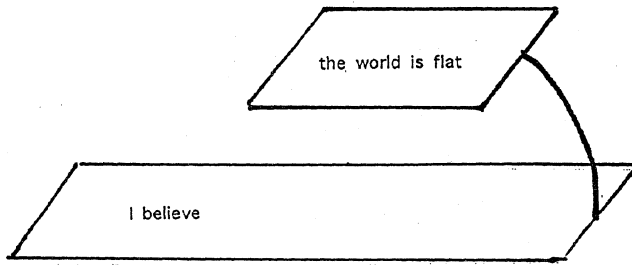


図1

この構造を真上から見ると、図2のようになる。

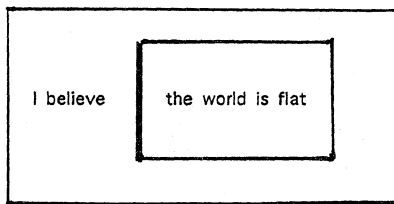


図2

これにたいして、(2)と何らかの関連がありそうで、統語構造の異なる(1b)は図3のようになる。

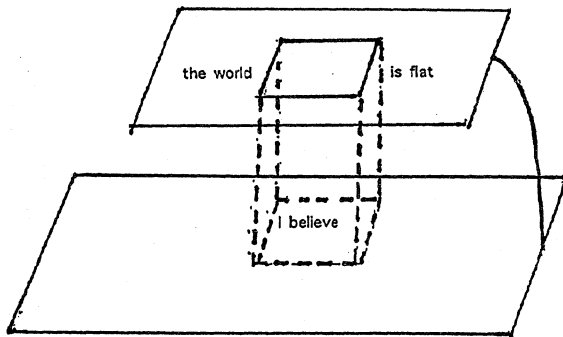


図3

図1と同じように、疑似主文タイプの挿入句のスペースと主文（意味的には補文のように感じられるが）のスペースが、三次元的な位相関係にあるのだが、主文のスペースに裂け目(gap)があり、そこから疑似主文タイプの挿入句を垣間見ることができる。真上から俯瞰すると、図4のように見える。

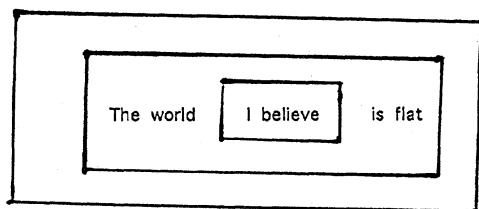


図4

何故平面で、直線ではないのか、もし直線なら、立体的な構造も平面ですむものではないか、という議論が起こるかもしれない。直線ではなく平面とした理由は、同一スペースに属する文が、平面内で統語的階層構造を持つことを許すためである。しかし、三次元的な位相関係にある平面どうしが、全体として統語的階層構造を持つことは考えていない。言語表現がそれぞれの構造を保ちながら、線形的順序において先行するか、後行するかという関係を持つのみである。

4 おわりに

疑似主文タイプの挿入句について従来の研究を考察し、三次元理論に基づき記述、分析した。三次元理論を用いることにより、統一的な記述、説明ができると主張したい。

問題がいくつか残る。まず、三次元理論の性質をどう考えるかである。Fauconnierのメンタル・スペースのような、統語論と意味論の間のインターフェイスのようなイメージを描いているが、もしかすると、KampのDRSのような談話の統語論のようなものなのかもしれない。

また、スペースの性質、スペースどうしとの関係、スペースの存在する平面のレベルも考察の必要がある。例えば、Hallidayのいう対人的機能(interpersonal function)とテキスト的機能(textual function)は、別のレベルにあるのか、それとも同じレベルにあるが、口語、文語というスタイルの違いを反映した、別の現れにすぎないのか等である。

さらに、三次元理論と、統語論、意味論、語用論との相互関係も、より明確にしていかなければならない。今後の課題としたい。

参考文献

- HALLIDAY, M. A. K. (1978) *Language as a Social Semiotic*, London: Arnold.
- JACKENDOFF, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, Mass.: MIT Press
- McCAWLEY, J. D. 1982. Parentheticals and Discontinuous Constituent Structures, *Linguistic Inquiry* 13, 91-106
- , 1987. Some additional evidence for discontinuity, in Huck, G. J. & Ojeda, A. (eds.) *Syntax and Semantics 20: Discontinuous Constituency*, Academic Press, 185-200
- , 1989. Individuation in and of syntactic structures, in Baltin, Mark & Kroch, A. (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, Chicago University Press, Chicago
- 岡田伸夫. 1984. 「挿入文の場合：リレー連載＝文法の核と周辺2」『月刊言語13-2』
- , 1985. 『副詞と挿入文』(大修館)
- Ross, J. 1973. Shifting, in Gross, M. et. al. (eds.) *The Formal Analysis of Natural Languages*, The Hague: Mouton. 133-69